

[AKASI エピソード 0] 全ての物語は、僕のこんな思いからはじまりました。

会社の理念は、こんなエピソードから作られました。

代表取締役 菅原晃弘

僕が老健施設に勤めていた時、あるケアマネから飛び込みの電話がきました。

「私の利用者にリハビリを受けさせたい」

僕は当時のデイケアの管理者をしていました。勤めていた施設は僕が育った街にありました。何もない田舎町です。

僕は、そこで【リハビリで街に貢献したい】と思っていました。

なぜなら、僕の爺さんに当たる人は脳梗塞で、当時はリハビリは大きな街でしか受けることができないもので、子供ながらにその理不尽さに心痛めていました。

【街の人にリハビリがある生活を提供したい】OT になって地元に戻った僕の目標でした。それが、1本の電話で打ち砕かれました。

「応えられない」それが、電話の答えになってしまいました。

「費用対効果」「儲かるのか?」「なんで、ウチがやるの?」耳障りな言葉を何の資格も持たない施設の事務長や施設長、本部から投げられた言葉に諦めるしかありませんでした。お金儲けの道具なのか?

オーダーをくれた家は、施設から約 30~40 分の距離にありました。

施設のデイには距離がありすぎて、利用者が見込めない。

訪問なら! 訪問リハなら、場所は関係なくなるんじゃないか?

どこでも、リハビリを提供できるんじゃないか?

自分がいけばいいんだから!

そう、考え画策していたところ東日本大震災がありました。

そこに、それまで議論には上がるが消え、また議論に上がる〔訪問リハステーション〕の規制緩和措置、いわゆる特区制度での設置が認められ、1号店が設立されました。

高田に行こう。そう思い施設を退職して、高田の1号店に就職しました。  
40歳、長男中学入学、翌年次男中学入学、次男と2つ違いの長女の「お前。これから金かかんべ〜」状態での転職でした。

その半年後に独立して会社を興しました。  
1号店の社長の名誉欲についていくことができませんでした。国会議員になりたい。有名になりたい。この震災を支援して人生をステップアップしたい。  
私たち専門職が望む形は、そこにありませんでした。

そこで、亀谷さんと櫻場さんと出会いました。  
亀谷さんの「ねえ独立しちゃうなよ」  
みち子さんの「あなたはいずれ、そういうことを言い出すとっていました」  
の言葉で、僕は僕の目標を、場所は違えど諦めずに進むことができました。

被災地で出会った利用者に近藤さん(仮名)という利用者さんがいます。  
活発で、活動的。大きな家の出身で、嫁いだ水産加工会社を潰した話をあっけらかんとする、自称肝っ玉かあさん。  
夫婦2人での避難生活。脳梗塞で左麻痺に。旦那さんの認知症発症とその介護、死別。

波乱万丈な人生の末に出会った近藤さん、もう長いおつきあい。  
現在は週2回本人の状態を確認しに行くことと、お話を聞きに行っているのが現状。あんまり、リハビリ本来の目的はない・・・

そんな、近藤さんが僕に「菅原さんに、お願いがあるのさ」  
「私が、死んだら息子と娘がいる葬式で、お母さんは幸せでしたと伝えてほしいのさ」

近藤さんには、東京に2人の子供さんが暮らされているようで、いつもボロ屋に住んで、一人ぼっちで寂しい思いをしていると子供達は思っているはずとおっしゃっていました。

近藤さんは「全然不幸だと思ったことない。だって、こうやって毎週話を聞きに来てくれて、笑ってくれる人たちが側にいるもの、幸せだっちゃ〜」

僕たちの仕事は、体に関わるお仕事です。

でもその役目は、時に利用者さんの心の支えや、生活の安心になる場面も多いはず。体だけではない、我々に関わることの安心、我々が地域にいることの安心、そんな訪問を提供し続けたい。「菅原さん、私の利用者お願いできる」って言ってもらえるようになって「さくらがあるから、安心して帰って来なさい」って、ケアマネが入院中の利用者に言えるようになった。

「お母さん幸せだったよ」って家族に本人が言えて「さくらがいてくれて、良かった」と家族が思ってくれた。

僕は、そう思ってくれる人たちの為に、地域にリハビリや看護を提供できる、そんな会社を！チームを！僕らの生きる地域につくっていききたい。

100年続く経営理念を地域で実践していききたい。

その方法は、すべて自分たちで導き出していききたい。

@PTOTの思いはPTOTが。看護師の思いは看護師が。

- ・もう誰かの名誉の為や誰かの保身のためにできる範囲を狭めない。
- ・もう誰かの金儲けの手段にはならない。
- ・俺たちは俺たちと地域の人の為の仕事をつくりたい。

@僕たちの可能性は、保険の範囲を超えていい

- ・保険の範囲を超えて、できることを探して、提供していい。
- ・必要なこと、求められていることは、保険でできることと≠ではない。

まとめ

僕らは、リハと看護の専門職です。

僕らは、もう誰かの名誉や保身のために仕事を選んだりしない。

僕らは、もう誰かの金儲けの手段にはならない。

僕らは、必要あれば保険の範囲も超えていく。

僕らは、地域で暮らす方々と僕らのために、仕事をしていく。

僕らの仕事は、僕らが決めて、しっかり地域に向き合っていく。

そして、みんなを幸せにしよう。みんなが幸せになろう。